

メディアによって描かれた教育美談 —紫雲丸事件による教師の殉職を中心に—

“Heroic Stories of Education” Portrayed by the Media: Focusing on the Teachers Killed in the Line of Duty Due to the Shiun-Maru Incident

益田（高橋）潤子
Junko Masuda

はじめに

近年、教員不足が問題となっている。藤田らは「長時間労働という実態が、教職の魅力を低下させ、教員を目指す人数に影響を与えていることが想定」できるとし、これが教員の働き方改革についての議論を生じさせた要因の一つだという（藤田2023：17-18）。

そもそも、教師の仕事はその職務を果たすために何をどこまでやれば良いのかを一義的に定められない性格を持っているため、教師らはどんなことでも必要と見なした仕事に取り組もうとする。そして、このような無限定な働き方を善とする理想像が、日本では長年共有されてきたとされる（長谷川2021：51）。

長谷川は、日本の教師には子どものために自己犠牲的・献身的に職務を果たす「子ども想いで熱心な」教員という、「献身的教師像」が広範に共有されてきたという。このような教師像が「生徒・保護者・住民などに共有されることによって、教員はその信頼・権威を確保することができてきた。それは戦前の1920年代に、当時の近代学校制度の普及とともに大量に雇用され大衆化しつつあった教員層の権威性を確保しようと、教育施策担当者が意図的に流布させたという面もあるものである。このように献身的教師像は、学校教育に関わる関係者たちが共有し教員の権威性を支える装置として存続してきた」と指摘する。そしてそれは、上記のような「権威調達の装置として機能するとともに、自分たちは子どものために自己犠

牲も厭わず献身的に職務を果たす存在である、またそうあるべきである」というイメージとして、教員たちにとってその教職アイデンティティを確保するための装置でもあった」と述べる（長谷川2021：51-53）

このように、戦前より献身的に子どもに尽くす教師が理想とされた結果、時間外労働を厭わない教師の自己犠牲を尊ぶ風土が構築されたと考えられる。

そこで本稿は、戦後の教師評価の一事例として1955年5月11日に宇高連絡船紫雲丸が貨物船と衝突・沈没し、紫雲丸に乗船していた修学旅行中の島根・広島・愛媛・高知県の多数の小中学生が犠牲になった事件を対象に、これらの地元のメディア（新聞）は、この事件における教師の対応をどのように評価したのかをまとめる。

筆者は、これまで戦後の学校事件・事故にみられたメディア（『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の全国3紙）の学校や教師を批判する語り（以下、「教師批判」）が、学校教育に与えた影響について考察してきた。その過程で「修学旅行事故における『教師批判』の出現に関する研究—紫雲丸事件を中心に—」を発表した。この研究では、教師が誰も殉職しなかった愛媛・高知県で、教師の事故対応を批判する声があったことがわかっている。

1922年に、宮城県の若い女性教師が野外写生で訪れた川で、溺れた3人の教え子の内2人を救助し、もう1人の児童の救助活動中にどちらも死亡した事件¹⁾では、メディア等に教師の自己犠牲が

美談として語られた(佐藤2019:161)。その一方で、万一、この女性教師が最後の1名の救助を諦めて存命していたら、女性教師は子どもを死亡させたとして叱責を受け、保護者の恨みを買っていたのではないかと佐藤は述べている(佐藤2017:150-151)。

佐藤は殉職に対する評価が戦前と戦後で異なるとの見解を示しているものの、紫雲丸事件にみられた愛媛・高知県の事例のように、生き残った教師が批判される風潮が戦後も生きていたのではないかと、それが今日のような自己を犠牲にして、教育に尽くす教師を善とする風土をつくってきたのではないかと、ということが、本稿の課題意識である。

本稿は今後の研究の足掛かりとするために、紫雲丸事件で子ども達が犠牲となった島根・広島・愛媛・高知県の地元メディアが、教師の事故対応をどのように評価したのか、そこに自己犠牲を求めるような語りがみられたのか否か、修学旅行の責任についてどのような語りがみられたのかについて分析する。

1. 事故は学校や教師の責任ではないとする記事

『山陰新報』

5/12「社説 遺憾極まる連絡船惨事」

洞爺丸は自然災害で紫雲丸は濃霧での事故だが、国鉄の「人災といつてよい油断、不注意を認めずにはおられない。このような事件が起きるとすぐ修学旅行計画の在り方よし悪しといった面が反省の問題になりがちだが、今回の惨事の如きは学校当局の旅行計画や引率教官の指導についてあえて問題視するところはない。」

事故翌日に、社説を用いて学校の計画や教師の指導に問題はなかったとする意見を表明したのは、『山陰新報』だけであった。この点に鑑みると、『山陰新報』は紫雲丸事件で学校の責任を問うことは妥当ではないと、早くから判断していたと考えられる。

2. 教師の救助活動に関する記事

『山陰新報』

5/13「明窓」

「川津校の女先生の中には一度甲板へかけ上りながら再び船室にかけ込んだ方があつたことが生き残った児童の話でわかつた。正しくこれ尊い殉職でなくてなんであろう。混乱が納るにつれて出て来るであろうこの種の美談、哀話はその都度われらの新たな涙を誘うことであろう」

5/14「“あの苦しみを忘れ 何時までも導きを” しめやかにT(実名が記されていたため、筆者が苗字のみイニシャルに変更、以下同様)先生葬儀」

5/17「殉職事実なら授位 T、S先生 文部省県教委に調査依頼」

6/9「T先生に勲八宝冠章」

『中国新聞』

5/12「相擁し泣く父兄、教官」「死者3、不明22名 旅館に収容された木江南校」

「不帰の客となった教員3名はいずれも生徒を助けようとして『早く出よ』とがん張っていたため犠牲となったと生徒たちの口から伝えられ、悲しみに口ビルをかんでたえる父、兄の心情はさらに痛ましかった。」

「【同校6年生…の話】」

「第3宇高丸に飛び乗った途端船は沈んだ。N先生(女)は“落着いて”とみんなを呼びながら波の中に見えなくなったしI(a)、S先生は児童を連れ出そうとしたまま見えなくなった」。

5/13「行けぬ子へ土産送った」「I先生も遂に帰らず」

「生徒を一人でも多く救い出そうとして自分は波の中に沈んでいった」I(a)先生が、修学旅行に行けなかった5名の生徒に旅先から土産を送っていた。

5/14「引き返して帰らぬ先生」

「I(a)先生は一度第三宇高丸に移っておられましたが女の生徒たちがまだ残っているのを知ってまた紫雲丸の方に飛び移られて船室の方に入って行かれるのをみましたがその後すぐ船が沈みました。」

5/16「悲劇と戦った8人の先生 紫雲丸沈没事件」
「“死の叫び”に船室へ 子供にすべてを捧げ

る」「同行した死亡の三教諭はじめ生存四教諭たちが教え子たちを救おうと身をていして油海の逆流と戦った尊い行為が生存児童たちの口から明るみに出てきた。故 I (a) 教諭…衝突の際紫雲丸の甲板で生徒たちにとりまかれていたが、生徒を宇高丸に誘導し、また紫雲丸に取って返しM君を宇高丸に救助したが、まだ生徒が紫雲丸に残っていたので船員が危いと止めるのをきかず紫雲丸に移り1人の生徒を救いあげ自分はそのまま力つきて波にのまれて浮かび得なかった。故N養護訓導…日ごろから水泳がよくできたので油海で死の叫びをあげるいとし子たちを救助するのに死闘を続け幾人かを助けたが多くの子供たちにとりすがられてついに力つきて海底に沈んでしまったもので、同教諭は毎年修学旅行に同行し、このたびも出発前に知人へ『私は子供を守るのが任務だから1人の子供が帰らなくても自分は生きては帰れぬ』と遺していたという。故S教諭…衝突と同時にW (a)、I (b) 両先生と子供たちを客室から甲板へ出すことに最後まで尽力、船室に海水が侵入して出ることができず、そのまま船とともに沈んだもの。N教諭…船の衝突の激動でころび全身を強打したが、これに屈せず痛みを忘れて子供たちを紫雲丸から宇高丸に移すため宇高丸に飛び乗って子供を次々と宇高丸へ受け取ることに必死となって活躍中、激浪で失神卒倒してしまった。I (c) 教諭…W (b) 教諭…両教諭は故S教諭とともに船室の子供を甲板へ出すことに懸命となっているうち船が沈みI (c) 教諭は激突のさい破損した個所から、W (b) 教諭は窓ガラスが材木で破られたところからともに奇跡的に海面へ押出されて救助された。I (c) 教諭は海中でブイをつかみT君をこのブイにつかまらせて泳ぐうち意識を失いかけたが救命ボートに助けられた。W (b) 教諭も海上に浮かんだとき白いヒモが流れていたのをつかまえたのが運よく救命具であったので海中の子供の救助にあたり意識を失う寸前ボートに助けられた。Y教諭…紫雲丸から宇高丸へ子供たちを移し、また海へ落ちた子供へ救命具を投与するなど紫雲丸が沈むまで懸命になっていたが、海に落ちそのま

ま失神し海上を流されているのを救命ボートに引揚げられた。なお生存の4教諭たちは教え子や同僚多数を海に失いまことに申しわけない。とうてい生きて帰れることはできぬと思っていましたが…木江町長に慰められて帰って来たようなわけだと語っただけで多くを語らず、子供の死と同僚の死に痛く心をいためている。」

5/23「少年 ニュース 解説」「悲しい紫雲丸の沈没」「…三教師に殉職手続き」

「松村文部大臣が参議院予算委員会で事件を報告したが、その中でとくに修学旅行中の教師が2人までも、1度は助かりながら生徒を救うために再び海中に飛び込んで死んだ美談を涙ながらに伝えたそう。しかし死んだものは帰らない……」

『愛媛新聞』

5/14「こわかつたあの瞬間」「死の“友達さがし”カバンかけたまま泳ぐ」

「先生はイカダの上でも人工呼吸を一しようけんめいやっていた。… K先生は『早く向うの船に乗り移れ、先生について来るな』と叫んで海へ飛び込んだ。他の生徒を救いに行つたのだろう。」

『高知新聞』

5/13「紫雲丸沈没事件を語る 上」「本社・ラジオ高知 特派員現地座談会」

「B 旅行には先生が4人ついてたんだが男泣きに泣きながら申訳ないとそればかりいっていた。先生にしてみれば自分たちが精一ぱいに行ったということすら申し開きできない立場にあるんだ。それを思うと4人の先生の気持ちには遺族以上のつらさがあったことだろう。(中略) 三段になっている甲板にそれぞれ監督の先生がついて分かれていたそうで、学校としては万一の場合に備えていたわけだ。G 事故発生の時先生たちは実によく活躍したそうだね。C 衝突した時海上には重油が一面に流れていたそう。先生が子供を引揚げようとしても油でロープや手がすべり、なかなかうまくいかなかったらしい。」

6/1「紫雲丸で殉職の先生に勲章」

「紫雲丸事件で殉職した広島県木ノ江町南小学校の3人の先生に勲章が授けられることになり31日文部省で伝達式が行われた。勲章を授けられたのは(中略)荷物を取りに船室へもどった子供達を追って殉職した人達で事件直後、参議院本会議で報告中の松村文相もこのくだりで思わず落涙したという。」

教師らの救助活動に関する記事を見ると、その多くが児童・生徒と共に教師が死亡した島根県と広島県の新聞(『山陰新報』『中国新聞』)のもので、主に殉職した教師らの救助の様子が美談として語られていた。その一方で、教師らが誰も死亡しなかった愛媛・高知県のメディア(『愛媛新聞』『高知新聞』)には、教師の救助の様子がわずかに報道されているだけであった。

3. 生き残った教師に対する批判的な記事

『愛媛新聞』

5/12「『何事もいうまい』涙もかれ果てた肉親」

死亡した生徒の父親は『この子は長男です。こんなことになろうとは夢にも思わなかった。生き残った先生方の気持ちも察せられますので何事も申しません』と語っていた。」

5/13「地軸」

「全部たすかった先生方には、とくに堪えられないものであろう。ある父兄が、この先生たちのことをおもんばかりで“何もうまい”と口をつぐんだというが、さもあるう▲先生方にギセイのなかったことーこの比較から何かを引き出すのはあの地獄絵シュン間を見ぬ立場の者としては軽率であろう。先生もつくすべきはつくした上のことと思う他はない。が、このことから別の“冷厳な事実”をくみとれぬでもない。そのセツメイは止そう」

5/13「社説」修学旅行と事故防止」

「小学校の修学旅行は県外へ行くことは自粛することになってきたにもかかわらず、あえて県外旅行を強行したことについて父兄間にかなりの非難が起っているようであるが、県外旅行のコースも日程も事前にわかつていたのだし、

それを承知で、わが子たちを送り出したのであるから、事故が起ったからといって学校当局だけを非難する父兄たちの、(中略)心情は察するにあまりあるとしても、やはりもつと冷静に考えるべきではないか。(中略)といつても、学校当局の責任が全くないということにはなりはしないのはいうまでもあるまい。およそ修学旅行は、授業の連続であり教室の延長として、はじめてその意義もあり効果もあがりうるのであるが、すべての場合がそうであるというのではないが、とにかく引率の教職員たちが物見遊山の気分になりがちのようでもある。その気のゆるみが事故発生の原因になった例もまた少ない。」

生き残った教師に対する批判的な語りは、『愛媛新聞』のみにみられた。『高知新聞』にはこのような批判はみられなかっただけでなく、生き残った教師が救助に奮闘していた様子も記されていた。このように、同じように教師が死亡しなかったとしても、必ずしも教師を批判する報道がみられた訳ではなかった。

4. 日教組の要望についての記事

『高知新聞』

6/3「南海中教諭の慰労を切望 高知市教組」

高知市教育委員会に対し高知市教組は、「今度の事故では学校当局に落度はなく引率の先生たちも遭難の際、全力をあげて生徒の救助に当たったことがわれわれの調査の結果明らかになった。委員会で表彰の措置を講ずるとともに、物心両面に対しても慰労の措置を怠らないようにしてほしい。とくに教員は今回の事件で精神的打撃をうけており、将来の学校事務に支障を来すことのないように、またそれぞれの経済的負担をもカバーするように援助をお願いしたい。」

日教組が生き残った教師の支援を要望している旨の記事を掲載したのは、『高知新聞』だけである。『高知新聞』は『愛媛新聞』のように生き残った教師に対する批判は行わなかったものの、このような記事を掲載させた結果、死亡しなかつ

た教師に慰労を求める高知県教組に対する批判が生じた(高橋2022: 19-24)と考えられる。

5. 修学旅行に関する批判的な語り

『山陰新報』

5/21「明窓」

紫雲丸事件で、修学旅行の在り方がしきりに論じられている。「時代と共にだんだん旅程がのびすぎたことは事実で、無理な日程を組んで、児童を過労に陥らせ、しらずしらず危険を冒すことになっていたことは事実だが▼さて何が彼等をそうさせたか。答は簡単である。戦後のゆきすぎた民主教育がPTAを作つて先生を監視し批判し、先生はまた相むすんで校長の校内行政を批判して投票でその信認を決める等のやり方が学校当局をちゞこませて、独自の見識をひつこめて、徒らに他の思惑に『あゆ』迎合する風をつくつた」

5/25「明窓」

島根県知事が投書で「教育委員会や教育長あたりの指導が手緩くて学校当局がいつしか出来た専門の修学旅行やのそろばんを弾いたプランをうのみにして来た傾向が年と共に小学生の修学旅行を長距離化せしめたいらしい点を衝いているのは正に頂門の一針である▼筆者はさきに本欄で敗戦民主教育のゆきすぎが学校における教師の権威を弱化して、教師がPTAや児童の顔色を見がちな弊を生じ、修学旅行なども独自の自信あるプランをたてることをおそれて数ある代案を作つて児童にアンケートして多数決で決めるために、いきおい長距離案が実現する点を指摘したはずだ(中略)父兄はわが子の情にほだされ先生は父兄の顔色をうかがうご時世がずるに今日の問題をつくりだしたと見ざるを得ない▼先生方よ、教組の会合で卓を叩いてベースアップを叫ぶ時の勇気を日常の教壇でも発揮しなさいといふたい」

『愛媛新聞』

5/18「地軸」

「ある読者からの投書は、こう書いている『生徒だけを三等船室に詰めこんで先生たちは優待

の二等室で酒を飲んでいて。そこへ生徒が来て“先生、××君がケンカしとるんですが”先生は“やかましい”とどなりつけて立ち上りもしなかつた』▲なにも一時が万事といつてしまう気持ちはない。やせる思いで気を配っている先生たちが、実際は多いのだろう。が、その中の何%かの考えのない先生たちの、そうした行為が見聞されるのは、やはり問題ではないか。直接事故を起した責任者である運輸関係者にだけ非難の矢を飛ばしては“恐怖の修学旅行”を射的ははずれよう▲早い話が、県教組はこのあいだの定期大会で“修学旅行と教職員”についてどれだけの反省をしたというのか。みんなでカンパを集めるという決議だけで良いのか。」

5/22「修学旅行禍」

「これまでの修学旅行の事故を考えてみると、旅行者側と輸送者側との両方の無理がたたっているように思われる。旅行者側、つまり学校側では、少ない費用で、できるだけたくさん見学させようとするから、無理なスケジュールを組む。輸送側つまり国私鉄や連絡船や遊覧船やバスは、数でもうけようとするから、無理な無責任な詰めこみ方をする。そのために事故が起つた場合、数多くの死者や負傷者が続出するのである。(中略)学校側では、大切な行事の一つとして予定し、実行する。だが、そのスケジュールの組み方に疑問がある。なるべく切り詰めた費用で、たくさん見せようとするうえに、その行先はきまりきったコースである。(中略)まったくのマンネリズムである。近年、それがマンネリズムであるということは、学校も生徒たちもよく知っているから、それを打破するために、もう一つ足をのばす傾向が生じている。(中略)行く場所は同じで、年々生徒はふえる一方なのに、それを運ぶ列車や遊覧船が老朽しており、バスは新車でも道路が老朽しているから、一たび事故が起ると、大きな災害となるのである。(中略)わたしは修学旅行のあり方について、まず学校側の猛反省をうながしたいのである」(作家、日本女子学園理事長)

『高知新聞』

5/13「遭難時の処置」「最悪事態に備えよ」

「修学旅行のあり方」日本交通公社高知案内所長

「修学旅行はあくまで学校授業の延長、すなわち社会勉強であるべきはずである。社会見学の課題を決定して、如何にそれを深く掘り下げて勉強するかにある。ところが生徒、児童の身体を考えずに無理な日程を組んで疲労困憊、何を見、何を学んだかわからない場合が多々あるのである。疲労のために交通事故や中毒事件などが相当数引き起こされている。このことは学校、PTA、生徒会などが徹底して考える必要がある。」

5/13「人命軽視の役人」「弔慰金は超高額出せ」

修学旅行生を「宿も乗物も見学場所もゴッタ返している中へ何で連れ出す必要があるのだろうか。行楽客のハンランする中へ割り込んでも『修学』にならぬばかりか一般社会もハタ迷惑である。『花だ！それくり出せ』と連れ出された彼らが、乗っても泊っても人混みにもまれ通して疲れた旅をしたあげく今度の難に遭ったとすればそぞろに哀れを催さざるを得ない。」

5/14「直言」「修学旅行に思う」

責任は学校にもある。「今の小中学校の旅行は義務教育ではぜいたくすぎる。“行けるものは行け！行けないものはのこって勉強しておれ”なのだ。そして旅行に行った生徒の収穫はどうだ。何もない零にひとしいものだ。莫大な金を消費するにすぎない。◇旅行のスケジュールも実に無理が多い。旅行中は一日中乗物に乗り一日中歩きまわり重労働に価する。もっと生徒の体のことを考えねばならない。学校はもっと無理のない（肉体的、精神的にも）全員参加出来るコースをとるべきだ。そして各自がしっかり責任と自信をもって行動に移っていただきたい。そうしたならば今度のようなことは起らないではなかろうか」。

5/14「紫雲丸事件の投げた波紋」「修学旅行シーズンで各学校に衝動」

「この事件を通じて最近とくに多くなっている小、中学生の県外旅行のあり方が関係者のあい

だで大きな問題としてとりあげられ強い批判と反省の動きが目立ってきた。（中略）問題は主に小、中学生の体力に過重なスケジュールの内容や、引率者の指導にあるようだ。これについては身体の出来てない小、中学生などを旅行させる場合はあまりにも日程を欲ばりすぎて夜行の連続などによる強行軍はいけない。こんどの場合なども疲労のために助かるべき命をむざむざ捨てる結果になった例がないとはいえない。（中略）各校の修学旅行をなるべく集中させないでいただきたい。最近、集中の傾向がひどすぎて客車の割当に困る。定員超過になるといきおい事故の場合に余計な混乱を生ずることになる。国鉄の手落ちをおおびするとともに先生方にも考えてもらいたい。（四鉄高知駐在旅客係主任）といったような学校側の扱いにも考慮すべきことが求められている。こんどの事故は学校側については止むを得ないものと一般にもみているようだが事故発生当時多くの子供が荷物を取りに船室に降りたり、荷物を持ちすぎて逃げおくれたりしている点は緊急事態に処しての生徒たちへの平素の指導訓練にまだ研究の余地のあることを示しているといえよう。」

紫雲丸事件を機に、『中国新聞』以外のメディアに修学旅行に対する識者や読者らの批判的コメントが掲載された。それらの多くは、小・中学生に日数もかかる長距離旅行は必要ないというものであった。これらの中には、あたかも日数のかかる長距離旅行を計画したことが、事故を誘発したかのように読める記事があった。また、『山陰新報』には戦後の民主主義教育の行き過ぎが、紫雲丸事故の遠因であるという記述もみられた。そして、『山陰新聞』と『愛媛新聞』には教職員組合の事故に対する姿勢を批判するような記事もあった。

おわりに

本稿では、1955年5月の紫雲丸事件で犠牲となった子ども達の地元である、島根・広島・愛媛・高知県のメディアが教師の事故対応をどう評価したのか、そこに教師の自己犠牲を求める語りが

あったか否か、修学旅行の責任についてどう語られたのかについて分析をした。

その結果、児童・生徒と共に教師も犠牲となった島根・広島県のメディア（『山陰新報』『中国新聞』）に、教師の事故対応を批判する報道はほとんどみられなかった。それだけでなく『山陰新報』は、事故直後から学校や教師に責任はないとする報道を行っていた。また、『山陰新報』と『中国新聞』には、殉職した教師らの救助の様子が美談として紹介されていた。つまり、1922年に殉職した女性教師の場合と同じように、教師の殉職が美談として語られ、生き残った教師に対する批判は生じなかったと考えられる。その結果、両県に殉職した教師らに勲章を与えようという動きが生じたと思われる。

その一方で、教師らが誰も殉職しなかった愛媛・高知県のメディア（『愛媛新聞』『高知新聞』）には、教師らの救助活動の様子は余り報じられなかった。それだけでなく、『愛媛新聞』には、生き残った教師を暗に批判する記事がみられた。また、戦後の民主主義教育を批判する記事や、自らの責任を問わない愛媛県教組の姿勢を非難する記事もみられた。そこには、子どもだけを死なせた教師に対する批判があっただけでなく、戦後の民主主義教育に対する強い不満もあったと思われる。

このように、1955年に学校や教師らの力の及ばない不可抗力な事故が起きた際、教師が殉職したか否かによって、教師に対するメディアの評価は全く正反対のものとなっていた。この点に鑑みて、戦後においても教師の自己犠牲を高く評価し、犠牲を払わなかった教師に対しては、戦後の民主主義教育への批判をも込めて、低く評価する動きがあったと考えられる。

今後はこの分析をもとに、1950年代後半の教師の評価形成に、メディアがどのような役割を果たしたのかを考察したい。

注

- 1) 読売新聞』オンライン「溺れた児童2人救助、残る1人と亡くなった21歳女性教員…殉職百回忌で追悼」2023年9月3日入手、<https://www.yomiuri.co.jp/national/20210707-OYT1T50355/>.

参考文献

- ・佐藤久恵2017「小野さつき訓導の人命救助と殉職の捉えについての考察—鷹野つぎの随筆と『少女の友』小野訓導追慕号にふれながら—」『東京未来大学研究紀要』12号、pp.149-154。
2019「雑誌『婦人世界』にみられる小野さつき訓導殉職の反響とその意味」『東京未来大学研究紀要』13号、pp.157-164。
- ・高橋潤子2022「修学旅行事故における『教師批判』の出現に関する研究—紫雲丸事件を中心に—」『九州情報大学研究論集』24巻、pp.15-26。
- ・長谷川裕2021「日本の学校教員における『献身的教師像』の現在」『高度教職実践専攻（教職大学院）紀要』5巻、pp.51-66。
- ・藤田穰2023「教員の働き方改革に関する一考察：学校現場から改革の在り方を問う」『福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要』7巻、pp.7-17。